

◆雪のない冬だった。駐車場の雪かきは一度もしなかった。こんなことは二〇一一年の暮れ、ふるさと山形に越してきてから初めてだ。地元はずっと暮らしてきた人も、こんな冬は見たことがないと言う。たしかに雪による被害はなかったし、除雪にかかる費用も浮いたことになる。しかし、ほんやりした春を迎えて、果樹は、田んぼは、水は大丈夫なのだろうかと心配になる。加えて、いまの新型コロナウイルスによる自粛ムードである。淡々と日常を生きることがだいじだと、自分に言いきかせているところだ。

◆私事で恐縮だが、母が昨年十一月下旬に亡くなった。九十一歳だった。葬儀は仏式で、お坊さんも葬儀社の人もよくしてくれたと思うが、まず考えることが滞りなく進めることとお金のことなので「これが母との別れだろうか」という思いが強かった。

母の葬儀の翌朝、「展景」の仲間である河内愛子さんが亡くなったとの知らせ。八十九歳。秋ごろから風邪が長引いているとは聞いていたが、こんなに早く…と半ば信じられない気持ちだった。河内さんは一人暮らし。あとで息子さんに聞いたところによると、夜、書き物か何かをしていて倒れ、亡くなったらしい。おそらく苦しまずに。河内愛子さんの葬儀は山形市にある教会だった。牧

師さんのお話があり、続いて三人のお別れの挨拶があった。牧師さんの話も心に響くもので、仙台からみえた友人など、それぞれが河内さんとの思い出を静かに語り、わたしは深く感動した。讚美歌もよく知らないながら声を合わせた。故人のお人柄、参列者という立場もあったかもしれないが、河内さんときちんとお別れができた気がする。

仏式では荘厳だが、お経はわからない言葉だ。わかる言葉で送る、お別れを言う。人の心に残るものとして、この違いはやはり大きいと言わざるを得ない。

◆短信で新野さんも触れているが、アフガニスタンでの中村哲さんの死も衝撃だった。帰国した折も忙しい中村さんは、西のほうの講演が多い。それが昨年五月、山形市で講演会があるということで早速申し込んで聴きに行ったのだった。平日の昼間だったので人数はそう多くなかったが、仙台から来た人もいた。みな心待ちにしていたのだ。中村さんが直接発する言葉には重みがあった。質問の時間に出た、貧困からくるケシ栽培などは、いいも悪いも生きている人の営みを感じさせるものだった。ほんとうに残念というほかない。いまインターネットで読めるインタビュー記事があるので紹介する。

「中村哲が14年にわたり雑誌『SIGHT』に語った6万字」

www.rockinon.co.jp/sight/nakamura-tetsu/article_01.html

(布宮慈子)

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊「展景」97号

二〇二〇年三月二十日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一―一七―二〇二

info@muninokai.com